

大塚和との邂逅 (9) 映画監督若杉光夫のこと (後編)

昭和30年代半ば以降の高度経済成長期に、その波に乗り切れず、または最初から無縁で社会的、経済的弱者となり、その貧困と無知のために苦境の中にあり、歯を食いしばって必死に生き抜いていこうとする人々が多くありました。大塚和と若杉光夫はそうした人々の姿を丁寧に描いて行きました。零細町工場、定時制夜間高校、労働争議、若年者の非行といったいくつかのキーワードを見出すことができます。下手をすればステレオタイプ化してしまい、冗漫なドラマ作りに堕していくところを救うのは、二人の映画に対しての、社会に対する確固たる視線と姿勢にあったのではないかと考えるのです。そして、懸命に生きる若者を演じた演技陣に拠るところも大きかったのです。浜田光夫、山内賢（浜田光夫と山内賢は玉川学園の同級生）、和泉雅子、吉永小百合、松尾嘉代といった俳優たちで、こうした中で太田雅子の出現は光っていました。太田雅子はその後梶芽衣子としてさらに大輪を開くことになります。若杉光夫作品では、感覚的な鋭さやアーティスティックさを備えたカメラワークはほぼ出てきません。ひたすらストーリーの展開に重点を置くため、脚本の精密さと破綻のない演出力に大きく影響されます。従って、その辺りの計算が破綻してしまうと、いかにも凡庸で焦点を欠いた作品に堕してしまう傾向があり残念な思いを何度も経験させられてしまいました。若手俳優（将来のスターたち）を売り出さんがための一種のプロモーション映画の量産かとさえ思えます。しかし、何とんでも観客の大半は「銀幕のスター」を見に映画館へ足を運ぶのであって、決して映画監督目当てで来るわけではないのですから。若杉光夫監督作品25本の中からは、「石合戦」（1955）、「サムライの子」（1963）、「川っ風野郎たち」（1963）、「七人の刑事 終着駅の女」（1965）、「太陽が大好き」（1966）を暫定的にベスト5として挙げます。（残念ながら25本すべてを見ていないため。特に1950年代の初期の作品を見つけ出すのは仲々至難の業です）

この5本の中で、「七人の刑事 終着駅の女」は、当時TBSテレビの連続ドラマの映画版であり、上野駅周辺の地域で犯人を追う刑事たちをドキュメンタリータッチでリアリズム重視で撮られ、その後の刑事もののスタンダードの素になったとも考えられます。もしくは、ジュールス・ダッシン「裸の町」（1948）、黒澤明「野良犬」（1948）の流れを汲むフィルム・ノワールの、セミ・ドキュメント的作品と言えなくもないでしょう。おそらく、雑踏の中を映したシーンは隠し撮りでの撮影と録音に拠るものでしょう。人気テレビドラマの映画化を日活は、この「七人の刑事」以外でもNHKの「事件記者」でも映画化し、山崎徳三郎監督で10本のシリーズ化を果たしています。（このシリーズは、10本中出来不出来はあるものの十分な娯楽性を備えた新聞記者サイドから見たクライム映画として成功していると思っています）

このリアリズム重視は題材は異なるものの、「サムライの子」「川っ風野郎たち」にも発揮されます。「サムライの子」では、北海道の田舎の小学校から東京へ転校できると喜んだ少女が、雨風しのげるだけのボロ長屋、しかも一帯は通称「サムライ部落」と呼ばれるバタ屋の貧民街だったところから始まります。父親と継母との生活は貧しく苦しいが、差別に遭いながらも健気に生きる少女の姿には心打たれます。特筆すべきは脚本が今村昌平であることです。今村昌平の名作「にあんちゃん」（1959）に通じるころのある作品で、安心できる演出力が窺えます。継母役の南田洋子の怪演も見ものです。

また、「川っ風野郎たち」は、今では東京ディズニーランドで有名な浦安の当時漁村だった頃の貧しい町で、父親を事故で失った兄と妹（山内賢と和泉雅子）のどうしても学校だけは出たいという強い気持ちと兄妹愛を描いた感動作です。浦安といえば、この作品の公開された前年の1962年には、川島雄三の「青べか物

語」（東宝作品 原作 山本周五郎 脚本 新藤兼人 主演 森繁久彌）という何とも川島雄三らしいカオスに満ちた喜劇があったことも思い出されます。

「石合戦」は、戦後になっても根強く残る因習と封建的な社会の中で一人の少年が成長する過程を描いた作品であり、名ばかりの民主主義を唱えた時代、本質的には何ら変わらない社会、むしろ権力と名声の獲得に走る田舎のボスの横暴と悪化する社会を非難する筋書きであり、悪はいずれ滅びる式の勧善懲悪的作品です。この主人公の少年を演じたのは、この作品でデヴィュウを果たした浜田光曠、後の日活青春ドラマを支えた浜田光夫です。この作品は製作が富士映画（大蔵映画の前進）と劇団民藝であり、日活は配給のみを担当しています。

「太陽が大好き」もまた、閉山となってしまった炭鉱町での貧困の物語。そうした中で抜け目なく幾分奔放ではあるもののエネルギッシュな少女（太田雅子）と酒と博打に明け暮れる父親を持つ青年（浜田光夫）を軸に社会悪に立ち向かう人々の姿を描いた作品です。若杉作品はこうしたパターン化されたシチュエーションの中で展開していくものが実に多いのです。こうした作品群の内容とそこに流れる空気感は、例えば中国第五世代の監督に作品や台湾、香港を含む東南アジアの振興作品群のそれと非常に近い距離感を感じるのです。最近見たヴェトナムのラン・タイ・ファイ監督の「走れロム」（2019）での若さを象徴する爆発的エネルギーなどに一脈通じるところを感じるのです。

これら5本の作品について、封切当時の時代を観察してみると、「石合戦」が封切られたのは1955年12月14日（12月13日という記録も）で、1956年の正月興業を間近に控えた時期です。尚、そのときの正月作品は、古川卓巳「顔役」（三橋達也主演）と森永健次郎「力道山物語 怒涛の男」（脚本 菊島隆三）でした。「サムライの子」は、1963年2月24日に牛原陽一「空の下 遠い夢」（和田浩治、和泉雅子主演 脚本 熊井啓 撮影 姫田真佐久）との同時上映作。この封切りの一週間後に東宝では黒澤明「天国と地獄」（脚本 小国英雄、菊島隆三、久板栄二郎、黒澤明 チーフ助監 森谷司郎）が公開されています。同じ年、1963年3月17日に日活では、大塚和企画、浦山桐郎の第二作「不良少女」（脚本 石堂淑朗、浦山桐郎 和泉雅子主演 撮影 姫田真佐久）が登場します。「川っ風野郎たち」は、1963年4月14日に吉村廉「アカシアの雨がやむとき」（浅丘ルリ子、高橋英樹主演）と同時上映。同月には、山田洋次「下町の太陽」、野村芳太郎「拝啓天皇陛下様」が松竹で上映され、東宝では三船敏郎唯一の監督作品「五十万人の遺産」（脚本 菊島隆三）も公開されました。「太陽が大好き」は、齊藤武市「青春のお通り 愛して泣いて突っ走れ」（吉永小百合、浜田光夫主演）、江崎実生「青春大統領」（石原裕次郎、浅丘ルリ子主演）の後を受けて、1966年5月11日からゴールデンウィーク明けの作品として、西村昭五郎「帰っていき狼」（山内賢、ジュディ・オング主演 脚本 倉本聰、明田貢 撮影 姫田真佐久）と同時上映されました。「七人の刑事 終着駅の女」については、日活のデータベースでは1965年6月26日公開とあるものの、その他のデータでは劇場公開された形跡はなく、また大塚和の私家版記録でも公開年月日が空欄になっている状態でした。1965年は日活にとっては、前年興業ベストテンに三作品を送り込んだものの、この年は一作だけになり凋落傾向が顕在化してきたときでもありました。